



松山散歩

「子規がいて 漱石が来る城下町」

松山市の坂の上の雲ミュージアムで見つけた「大西隆久」さんの句です。おそらく松山を旅した時に詠んだのでしょう。

先月、愛媛県松山市に出張する機会があり、早朝2時間ほど城下町を散策しました。

松山市の中心に立つ松山城、坂の上の雲ミュージアムなど歴史と文化を肌で感じました。通りには石に彫り込まれた多くの句碑が点在し、刻まれた言葉に心を寄せながら歩けば時が経つのも忘れてしまいそうでした。

通称「子規の花通り」には、指宿と同じように多くの花壇があり、正岡子規の花をテーマにした俳句が添えられています。生涯花が好きだった子規をしのび、通りの人たちが大切に育てた花に「ようおいでたなもし」と子規の声が聞こえてきそうでした。

子規の文学はその病と切っても切り離せないものであったようです。虚弱体質で背も低く、内向的だったことからよくいじめられていたとい

ます。当時結核は不治の病といわれており、医師に肺結核と診断された者は必然的に死を意識せざるを得ませんでした。多くのペンネームを持つ子規ですが、雅号の「子規」とはホトトギスの異称で、結核を病み咯血した自分自身を、血を吐くまで鳴くと言われるホトトギスに喩えたものです。子規は、記者としての従軍から松山に帰郷した折、当時松山中学校に赴任していた夏目漱石と出会っています。「吾輩は猫である。名前はまだ無い。どこで生れたか」と見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というのを見た」漱石のあの有名な「吾輩は猫である」の書き出しです。

通りを歩いていると汗が流れてきました。本格的な夏を迎える前に時期としては猛暑が各地で相次いでいます。やがて梅雨が明け本格的な夏がやって来ます。漱石の猫が「団扇を使ってみたが握る

ことができない」と愚痴るのは、おかしくも気の毒な気がします。

節電の夏が始まります。人は文明の利器を駆使して暑さをしのいでいますが、暑さの夏に外に飛び出し汗を流すのも健康のためにいいのではないのでしょうか。

「夏に快汗、温泉で快感」個性ある指宿の夏の過ごし方の一つかもしれません。

ところで、子規は約3年間ほぼ寝たきりで、寝返りも打てないほどの苦痛を麻痺剤で和らげながら、俳句・短歌・随筆を書き続けています。その中で高浜虚子・河東碧梧桐・伊藤左千夫・長塚節ら後進の指導をしています。

碧梧桐は、暑さに参る寝たきりの師匠に手動の扇風機を作り、子規はそれを「風板」と名付けています。

松山といえば道後温泉。田舎の穏やかさもあれば、都会の便利さも、そして文化や歴史の楽しみもある素敵な温泉街でした。



指宿市長
豊留悦男